

歯科診療の情報バリアフリー

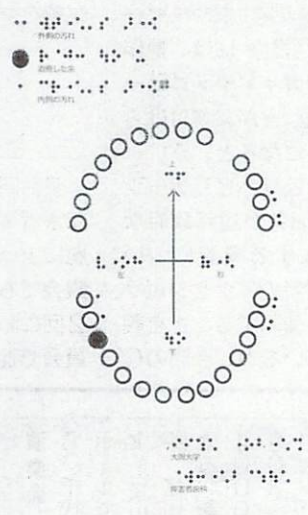
歯の病状や治療内容を点字や触図で患者に伝える情報提供システム「DENTACT(デンタクト)」を、大阪大歯学部(大阪府吹田市)と神戸大医学部(神戸市中央区)の研究チームが開発した。阪大歯学部付属病院で実用化に成功しており、研究チームでは「全国的に普及させ、視覚障害者が歯科を受診しやすい環境づくりに役立てたい」と話している。

(平井 俊行)

点字 最前線を行く

デンタクトは、歯科医師が歯や歯茎の状態、処置内容、次回の処置予定などをパソコンに入力すると、自動で点訳し、印刷される仕組み。点の大きさや線の太さなど、視覚障害者に触ってもらいながら、2006年から試作を重ねてきた。

「歯石を取りました」「歯茎にお薬を塗りました」など定型文を選んで入力する方法と、説明を直接入力する2種類の方法がある。点字プリンターを使ってB5用紙に印刷する。これにA4用紙に印刷した触図を添えて患者に渡している。触図は加熱すると印字された部分が膨らむ性質を持つカプセルペーパーで製作。パソコン上の図に、治療した歯や汚れの場所を入力する



と立体コピー機で印刷でき、図は直径9mmの円を曲線状に並べて上下の歯並びを再現。列の外側が歯の表面、内側が裏側に当たる。直径2mmの突起がある箇所

情報提供システム「デンタクト」

点字と触図で治療説明

10分で文書作成 実用化にも成功

開発のきっかけは06年4月の診療報酬の改定。歯科診療で患者に病状や治療などを文書で説明することが義務付けられた。しかし、視覚障害者が墨字の文書を読むのは困難で医師やボランティアなどに説明しても

大阪大と神戸大が開発

らわなければならなかった。得られる情報の差による医療格差や健康格差を危惧する声が医師らの間にもあったという。全ての患者に分け隔てなく、歯科診療の情報を伝える取り組みの必要性が目ざされ始めたことを受け、18年にわたって障害者を対象とした歯科医療の研究、実践を行ってきた大阪大歯学部がシステムの開発に乗り出した。目指したのは、医療スタッフに点字や触図の知識がなくても視覚障害者に口の中の状態や治療内容を点字で情報提供できるシステム。「点字文書の情報量と分かりやすい触図の製作、作業の省力化」の3点が課題だったという。開発を始めたばかりの頃は墨字文書に点字ラベルを貼り

は歯垢など汚れのある部分。歯がない箇所は空白で表す。虫歯は直径9mmの突起で表し、点字の説明文にも「左下の3番目に虫歯があります」など場所を記す。また図には上下左右の方向が分かるよう、中央に縦7mm、横2mmの十字マークと点字表記がある。ソフトは全国の国立大病院、障害者歯科医療機関、歯科医院などへの提供を視野に今後も機能の向上を目指す。立体コピー機は20万円程度で市販されている。

歯科医療情報提供システム「DENTACT」
—阪大歯学部付属病院で



属病院障害者歯科治療部の村上旬平助教は「病院での障害者への情報提供のバリアフリー化を一層進めることが必要だ。歯科以外の医療機関へも広げたい」と話している。問い合わせは、阪大歯学部付属病院障害者歯科治療部(06・6879・2280)へ。

付けて患者に渡していたが、ラベルの印刷に手間がかかるうえ、見た目も悪かった。次に考えたのは立体コピー機を使った触図の製作。省力化を図ろうと一枚の紙に図と説明文を盛り込もうと試したが、文字での説明はごく短いものに限られるため、従来より分かりにくかったという。そこで触図と説明文を別々に印刷し、点字文書を簡単に作れる方法を検討。病名や薬剤名などを高い精度で自動点訳するシステム「イープレイル」を開発した神戸大医学部に協力を頼んだ。同システムに「歯質」など計1638の歯科用語を追加

解消法先取り 全国へ普及を

今年6月に成立した障害者差別解消法では大病院などの公的機関に対して障害者への配慮義務が定められている。施行は2016年4月から。法律ができたことを受け、阪大歯学部

し、歯科医療用の点訳プログラムを開発。今年4月に今の形にたどり着いた。改良により30分近くかかっていた作成時間は10分程度まで短縮。患者には好評で、「このように磨くと良いか」「口の中の様子を詳しく教えて」など積極的に医師に話しかける患者が増えた。